

親志の始まり

喜友名 初江 (1922・T11) 字親志 (03:20)

んかし おやし はいばん ゆー すい あしりどうんち
昔 ぬ親志や、廃藩ぬ世に首里から安勢理殿内と
ながやまどうんち ちゆたー おやし う
う 永山殿内、うん人達が親志んかい下りていめん
かいこん あ
そーやーに、開墾あきてーるばーて。開きていさくと
ちゆいちゆい むる すい ちゆー あま
う、うにーから一人一人、全部首里から 来い、彼処
うんま とうやー
からん、其処からん取合いジマやるばーて。

あんすぐとう、山ぬ中にん何処にんきーにん家あ
あ へー かいくん たこうやま おやし
在てい。早こー開墾、多幸山んりたんでい、親志え
ちゆい ちゆい あち たこうやま
ど。一人、一人かんし集まいしんで、「くれー多幸山
かいくん い ぬー
とうか開墾でい言ちえーならんむん。でい、何がな
ち ち こんど なが
ぬ、うり付きら」んでい言ちさくとう。今度おくぬが
やまどうんち あしりどうんち おや ころざし
山殿内、安勢理殿内ぬくぬうりがてー、親の 志、
おやし ち
親志んでいち付きてい。

せんぜん おやし まー ちゆ
戦前ぬ親志え、「いやー、何処ん人が？」でいねー
おやし げつたいわ
よー、「親志やいびん」でいれー絶対分からん、
たこうやま わ たこうやま
「多幸山」でいねー分かいたん。「多幸山やいびん」で
いねー、「えー、彼処なー」でい言たぬばー。今る、
おやし おやし
「親志、親志」する。

あんさーにまた、親志んかい 土 帝 君んち在しえ
おやし とうていーくー あ
ーやー。うりんジャーラんでいちぬ山ぬ在んよーやー。
やま あ
其処からかんし、ジャーガル 土、あり握りめんそー
うんま んちや にじ
やーなかい、其処かい。あんさーに、土 帝 君、海
うんま とうていーくー うみ
やーなかい、其処かい。あんさーに、土 帝 君、海
やま とうていーくー とう
とう山とう、土 帝 君やんでいる、あぬうり、唐ぬ
な
名てつ。

あれから、あんすとう、一軒、二軒でい五十軒ば
いっけん にけん ごじゅうけん
かーん在いびーたんやー。うぬあたいたんごーやー。
あ
んかし あ
昔 えなーひん在たがやー。

うんにーからエイサーでいるむん、でい、あぬ、う
りしんだでいやーに、エイサーやくとう。親志ぬエイ
おやし
サーやなー、うみちつとう昔物。戦前でーじやたん
んかしむん せんぜん
どー。親志えなー何ん見じゆる物お無らん、エイサ
おやし ぬー ん むの ねー
ーばかーるやしえーやー。酒ー口ん飲まらんたんど、
さきちゆくち ぬ
このエイサーねー。終わったらね、すぐまた、事務所
お じむしょ
すり をうた のー
んかい揃やーに 疲い直しーすたしが。

【共通語訳】

親志はね、廃藩置県後に安勢理殿内と永山殿内の人
たちが首里からいらっしゃって開墾したのが始まり
のようだ。それから、首里やあちこちから一人一人と
集まってきて、寄り合ってきたのが親志であるわけ
さ。

それで、山の中のあちこちに家が散在していた。ず
っと以前は親志のことを開墾とか多幸山と呼んでい
たらしいよ。けれど、一人一人と集まってくるにつれ
て、「多幸山とか開墾と呼んではいけない、さあ何か
名前を付けよう」と言って、永山殿内、安勢理殿内の
方々が親の志ということで親志と付けた。

戦前は、「お前はどこの出身か？」と聞かれて、「親
志です」と言うと、分からない人が殆どで、「多幸山で
す」と言うと分かってもらえた。「多幸山です」と言
うと、「ああ、あそこか」と言ってね。今でこそ、「親志」
という名で通っているんだがね。

それからまた、親志には土帝君があるでしょう。そ
れはジャーラという山からジャーガル土を取ってき
て、そこに仕立てたものでね。海と山と土地の神とい
われる土帝君というのは唐から来た名前だよ。

その後、親志は一軒、二軒と増えて、五十軒ぐら
いありましたよね。そのくらいはあったと思うよ。それ
とも、昔はもっとあったかな。

家も増えてエイサーでもやってみようかと始めた
ようで、その頃から親志のエイサーはあるよ。戦前、
親志で催す娯楽は、エイサーぐらいしかなかつたから、
それはもう評判になっていたよエイサーをしている
間は酒を一口も飲めなかつたよ。全て終わってから事
務所に集まり慰労会をしたんだ。

あんとう、此処くまぬ 甕かみかた 担くまみてい、「此処くまぬハンシーメ
ーや御肝うちむゆ良いたさみしえーくとう、一合いちごうがうたびみし
えーらー、二合にんごがうたびみしえーらー」んちよー、甕かみ
担かたみやーが居をうん、酒さきぬ貰をうやーが居ぬるばー。あん、飲む
んちしーねーて、なー絶ぜったい対さきぬ酒飲まらん。

それが、夜よるの十時じゅうじく頃あちから集あまいびーていー。うぬ
あたいから始はじまやーに、うぬ土と帝てい君く一い回くわい巡めぐれー
からー、もう明あくる朝あさぬ八時はちじく頃うまでいねー終まわいた
がやー。うぬ間えまな一、絶ぜったい対に眠いぶいんならん。あんとう、親おやし志しエイサーんち大事だいじな音うとうた立たちよーたんよー
や。

丁度ちよーる、私わつたーが十じゅういち、二に、三さんないたがやー、学がっこう校、
あぬー今なまぬ飛ひこ行じょう場、碑ひもん文あぬ在なましえーやー今うんま、其ほんごう処い
本校ほんごうんでい言いたんよー。其うんま処ごじゅうねんぬ五ご十じゅう年ねん記き念ねんでいち、
なアシビほうすぬ棒いる、色いろ々いろ二に十じゅう四よん箇か字あざから出うんじうんやす
たんで、親おやし志しエイサー一いちばん番ばんなと一いちばんたん。うん、一いちばん番ばん
なと一あまたんどー。彼あま処しんぼる、千しんぼる原しんぼる、千しんぼる原しんぼるエイサーでい、
あぬ親おやし志しえ言いたしがてー。

エイサーでは、甕かめを担かいでいる者が、「このハン
シーメー（お婆さん）は心が広いので、一合いちごうくださる
のか、二合にごうくださるのか」と歌いながら、その甕かめに酒
を貰かっていた。でも、エイサーが終わらないうちは酒
を飲かみたくても、飲かむことはできなかつたよ。

夜の十時じゅうじ頃から集あまってエイサーを始め、土と帝てい君くを
ひと回りしてから、明あくる朝あさの八時はちじ頃うまでには終まわつ
ていたかな。その間まはもう、絶ぜ対たいに居い眠いりもできな
いぐらだった。だから、親おやし志しエイサーはそれはもう評ひ判はん
だったよ。

丁度ちよーる、私わつが十じゅういち、二に、三さん歳の頃ころだったかな、読よ谷こ飛
行ぎ場じやう跡せ地ちに碑い文ぶんがあるでしょう。そこに読よ谷こ山さん尋じん常じやう高
等たう小せう学がく校こうの本校ほんごうがあつて、その五十周年記念には、各
字あから芝あ居いや棒ぼう術じゆつなど色いろ々いろな出でし物ぶつが出でされて、親おやし志し
はエイサーを踊おどって一いちばん番ばんになつた。その頃ころ、盛さかんだつ
たエイサーは（嘉か手て納なの）千ち原げんから習しつたものだと言い
っていた。